

随泉寺寺報

平成16年(2004年)4月号 第404号

082-892-0217 <http://ww41.tiki.ne.jp/~tetunari4/>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

春季永代経法要

講師 順覚寺住職 檀崎正道師

講題 「後世を知るを智者とす」

久方の 光のどけき 春の日に

しづ心なく 花の散るらむ

(古今集 卷2 春の歌) 作者 紀友則

日の光のゆったり のどかに暖かい、おだやかな春の好日
人は皆 陶然と安らいているのに、桜の花ばかりは、静かな
心もなく、あわただしく散る音もない花吹雪。なぜそんなに
散り急ぐのか……。散り急ぐ花に寄せる哀感漂う絶唱。

春の歌を選ぶとき、どうしても花が散る、その悲しさを読
んだ歌を選んでしまいます。前半部分では春のゆったりとし
た言葉によって、心までもが眠るような季節を表現している
気がします。その一方で、なぜ花はそんなに急いで散ってしまうのか？
花の心はどのようなものなのでしょう？私はこの歌の流れるような表現
が大好きです。桜がこれから開花する時はとてもドキドキし、なんてきれい
なのだろう...と感動するものです。そして、桜が散っていく時...それは
なんと切なく、悲しい気持ちになります。

4月の法座予定

- 4月14日昼席午後1時より……春季永代経法座
- 4月14日夜席午後7時半より……出張法座 望ヶ丘集会所
- 4月15日朝席午前10時より……春季永代経法座 仏婦総会
- 4月15日昼席午後1時より……春季永代経法座
- 5月 2日午後6時より……門信徒会本部役員会



生 (いのち)

杉山平一

ものをとりに部屋へ入って
何をとりきたか忘れて
もどることがある
もどる途中でハタと
思い出すことがあるが
そのときはすばらしい



身体がさきにこの世へ出てきてしまったのである
その用事は何であったか
いつの日か思い当たるときのある人は
幸福である



思い出せぬまゝ
僕はすごすごあの世へもどる

このごろ物忘れが激しくて、自分でも情けなくなります。この原稿を書きながら
も、資料があると隣の部屋に行ったら、何をとりきたのか忘れてしまうことがあり
ます。結局もとの部屋に帰って、何をしに隣にいったのか解らないことがあります。
ひどいときには手に持っているものを探していたりする始末です。人生も私は何を求
めて生まれてきたのか、何を目指して生きているのか、杉山平一は 身体が先に生ま
れてきたといっています。その意味に後できずいた人は幸せものであるといっていま
す。何をしに生まれてきたのか、むなしく過ぎては残念なことです。天親菩薩は【観
仏本願力 遇無空過者】といわれ、ご和讃には「本願力にあひぬれば むなしくすく
るひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」気が付いてみたら、
人間に生まれさせていただいていたいました。何を探しに生まれてきたのかそれが解らず
すごすご帰るのでは、空しいことです。

崇徳高校バレー部 今中健太君

去る3月20日から行われた「第35回全国高校バレーボール選抜大会」(春の高校バレー)
において、崇徳高校バレー部が広島県を代表して出場しました。その選手のなかに西長
者原の今中丈一さんのお孫さん 今中健太君がレギュラーとして出場していました。
24日、25日とテレビでも放映され、背番号5として活躍されていました。

御礼

永代経懇志 拾萬円 山村 信和殿 故 山村 春信様 特別永代経志として
特別懇志 貳拾万円 木俣 敏子殿

最後の教え

中川 明彦

月日のたつのは早いもので母が御浄土に旅立ちもう一年をむかえます。母が亡くなったというショックが、家族に与えた影響は測り知れないものがあり、立ち直るには相当の時間を要しました。特に父にとっては永年一緒に住み暮らした母の死は、なかなか受け入れ難く、私達を心配させましたが、今は従来の明るさと元気を取り戻しております。母との思い出は数多くありますが、今も脳裏から離れないのは、母と会話をした最後の日のことです。それは母が亡くなる二日前の4月27日の日曜日の事で、その日



午前中 私は母が退院したら喜ぶであろうと思い、家の前の畑に茄子や胡瓜等の野菜の苗を植え、昼食後、入院先のマツダ病院に見舞いに行きました。

病室に着くとすぐ「車で帰るの？暗くなると怪我のもとだから明るいうちに尾道に帰りなさい」と、前回肺炎で入院した時とあまり変わらない様子で言いました。

その時には、これは何日かたてば退院できるだろうと思い、軽く手を握り「うん、分かった。早く元気になって帰り、今日植えた茄子や胡瓜に水をやって」と言いました。



尾道は三年前からの私の単身赴任先の事です。それから暫らくして、母としては精一杯の力で、私の手を握り「先祖を大事にしてね。人には可愛がってもらいなさい。お父さんを大切にしてくれ」と、母が今まで私に語り教えてきた集大成的なことを言い、最後に「あまり良いお母さんではなかったね。ごめんね」と、ぼつりと言うと、少し疲れたのか目をつむりました。私は「そんなことはないよ」と言うのが精一杯で固く握った手と手の上に、涙が落ちて止まりませんでした。

それから二日目の朝5時、尾道の家の枕もとの電話が鳴りました。それは妻からのもので「お母さんの容態が変わったのですぐに帰って」と、いうものでした。

すぐに車に飛び乗り、マツダ病院に向かいました。車中、母との会話が思い出され涙が溢れハンカチで目頭をおさえおさえ運転して帰りました。マツダ病院に6時頃到着、私を待っていたかのように7時18分帰らぬ人となりました。



これからは母の教えを心に刻み、家族共々お念仏に生かされていきたいと考えております。

合掌

どの木も どの草も 輝きながら伸びていく

カレンダー4月号 東井 義雄

草も木も、いのちを輝かせながら伸びていく春です。

でも、伸びたがっているのは草や木だけではありません。どんなお子さんでも、仏さまの願いを信じ、仏さまのお心を心として接して下さる方にめぐりあうと、よい子にならずにおれなくなってきました。

Mくんは、一年生の頃から女の子の便所のぞきをする、家の金を持ち出してむだづかいをする、自分の席にじっとしていることができず、歩きまわってみんなの頭をたたいてまわる、お掃除の時間になると机をひっくり返す、ゴミを蹴散らかして暴れまわる、未恐ろしい やんちゃ者といわれている子でした。

ところが、仏さまの願いを深く信じているK先生に三年生になつたときめぐり合いました。これはMくんが小学校を卒業してから述懐したことです。今までであったことのない懐かしい方にめぐりあった気がしたというのです。最初の日「明日から勉強する教室、ピカピカにしようや」と先生がいわれたとき、「先生、ぞうきん貸して！」と、思わず叫んでしまったといいます。それをまた先生が喜んでお母さんに手紙で報告されたのです。お母さんは感激なさり、すぐぞうきんを縫ってあげて下さいました。翌日「先生、きょうは借りんでもお母ちゃんが縫ってくれた！」とぞうきんを広げたときMくんはびっくりしました。「がんばれ、しつかり、しつかり」と、太い刺しゅうがしてあったのです。先生も感激して、「はよう校長先生に見てもらってこい」といいつけて下さいました。やんちゃ者のくせに気の弱いMくんです。毎晩、日本海くらい寝小便をすると自慢しているやんちゃ者につきそわれて見せにきました。私も嬉しくて、仲間にとりまかれてぞうきんを広げているMくんを写真に写してやりました。その頃から彼はものすごいがんばり屋になりはじめました。



そして、五月、鯉のぼりの下で運動会をやった時には、入学以来、文句ばかりいって走ったことのないMくんが、はじめて走りました。成績はビリから数えて二番目でしたが、先生は「きょうの一番よりもねうちがある」といって、肩をたたいて励ましてして下さいました。こっそり見に来ておられたお母さんは、感激して、運動場の泰山木の木の下で泣いてしまわれました。そして、こういう中で、ほんもののがんばり屋になつていったMくんでした。伸びたがっているのは、草や木だけではないのです。